

批評・紹介

古代チベット史研究 上巻

佐藤 長 著

昭和三十三年九月 東洋史研究會發行
A5版 四九六頁 地圖一葉

著者は、既に本誌や史林などの學術雜誌に、しばしば古代チベット史に關する秀れた論文を發表せられ、その一つ一つに堅實な業績を示してこられた。本書は、あるものは新しく、あるものは從來發表せられた論文を補筆改訂せられて、金城公主の降嫁をめぐつて起つた諸問題までをまとめたものである。いま一冊の書物となつてこれを繙くと、著者が約二十年の長きに亘つて研究せられた苦心の跡が明瞭に浮び上つてくるし、またその間のチベット學研究に關する世界の進歩をもうかがうことができる。そのことについて、以下、序論より順を追ひながら管見してみよう。

先ず序論第一に、問題の提起として古代チベット史研究の基礎的課題としての王統論をとりあげられたのは妥當なことである。この問題の研究には、チベット側の文献としてのプトン佛教史をはじめとするチョエジュン類と、中國側の史料としての兩唐書をはじめとする史書類との比較研究が行われねばならない。この方法によつてある程度の結論は得られるけれども、悉くを解決することができず、或る限界に到達した後は遍々として進まず、あたかも沙漠に踏み迷つたような救われ難い苦しみを嘗めねばならないことになる。この

序論第一は、著者が本誌第十卷第六號(昭和二十五年二月)、同第十一卷第二號(昭和二十六年三月)に掲載された論文を補正改訂されたものであるから、顧みれば、この論文を書かれた昭和二十六年頃には、まだ迷宮に踏み迷つたような苦難を経験しておられたことがわかる。しかしこれは、獨り著者のみでなく、凡そチベット史研究を志した者が誰しも体験するところである。

それでは、著者は如何にしてその迷宮から脱出せられたか。著者はそれを、次に、序論第二・問題の解決方法として示しておられる。それは近年ヨーロッパの諸學者によつて續々として發見せられた同時代的史料による對比研究である。これら新出史料に對する諸研究は、戦後の惡條件のために著しく入手がおくれた。それをもつと早く入手できていたならば、本書はそれだけ早く出來上つていたことであらう。ヨーロッパからこれらの書物が續々と到着したとき、チベット學研究者は驚嘆の聲を發せざるを得なかつた。實際のところわれわれはアレヨアレヨとただ驚くばかりであつたのである。ところが、著者はいち早くそれらを悉く讀破し、問題を一つ一つとりあげて着々と解決してゆかれたのには更に驚かされた。かくも迅速に著者が決定的な成果を積み上げてゆかれたのは、いうまでもなく、それまで十餘年間もかかつて、たゆまずに漢蕃の史料を對比研究し、幾多の尊い苦難を経て、もはや十二分な準備態勢を整えておられたからにはかならない。

さて著者は、序論第二において、新出史料によつて解決せられようになつた諸點を、佛教史の問題に限つてとりあげられた。その中、寺院の建立についてプトン史は二十四の寺院名をあげている(本書四八頁、四九頁)。けれども二十四という數は、餘りに多いの

で誰もがその信憑性を疑った。というのは、寺の起源を古く溯らせることによつて寺の價値を高めようとすることは常に行われることであり、他方また、その他のチベット史料、例えばテブゴンなどにはこれ程多くの名が記されていないからである。しかるに著者は、新出史料によつて、七つの寺院がブトン史の示す通りであることを證明せられた。他の十七については明確な證明を得るまでに至つていない。そこで著者は、「もとより一斑を以て全貌を推すことは慎むべきこととしなければならぬ。しかしとにかくチベット傳來の佛教史類は物語ではなく、一個の信賴すべき歴史的事實の記録である……」といつておられるのは、いささか不安なしとしないが、將來の研究によつて、恐らくこの結論に歸着するであらう。昨年ローマの中亞極東研究所から出版された故 Alfonso Ferrari 女史の *Mk'yen Brtsé's Guide to the Holy Places of Central Tibet* 1958. を見ると、これら寺院の中で著者が證明していない寺院名が出ている。例えば、ガムボ王建立といわれる寺院のうち、a ガツェル、d ロンバギャン、f ロータグのコムティンの三寺は新出史料に見られないものであるが、それぞれに詳しい註記が施され (a は註一、二三、d は註五五六、f は註三七三)、また a と f は寺の寫眞 (a は寫眞一四、f は三六、三七)まで掲載されている。尤も Mk'yen Brtsé は一八二〇—一八九二年の人であるから、その史料は大へん後代のもので年代的價値はないけれども、寺の位置などを知ることができる。A・フェラリー女史は一九五四年に天逝せられ、その遺稿は、ベテック教授がそれを整理し補訂してようやく昨年出版せられたという事情であり、その出版は本書と殆んど同じ頃であつた。それで著者はそれを参照せられるに至らなかつたのである。

次に、政治上活躍した佛教僧として、ティンゲンジンとベルグエンテンとの二人に關して述べられている。この二人については、チベット大藏經の中に、翻譯名義大集の次に収録されている語合二章 (東北目錄四三三七)の序文に、午の年にチデソンツェン王の命令でこの兩人などが合議して作つたものであることが記されている。語合二章は名義大集の難解な語に對する解釋書であつて、この二書が相前後して作られたであらうと考えられる。當時佛教經典の大規模な翻譯事業の要請にもとづいて編纂せられ、今日もなお學者が珍重するこの名義大集は、この二人の合議によつて完遂せられたものと見做される。この二人についてこのことを補足しておきたい。

次に序論第三として、チベット語の音寫の問題を論じておられるが、それは中國史料に見える固有名詞の漢字音寫をチベット原名に對比あるいは還元する必要上、是非ともそれを取りあげねばならぬからである。チベット語の音韻の問題は、近年漸く盛んに研究せられるようになってきている。著者は、かつて中國に在つてチベット人から直接發音を學ばれたのであるから、ここに論述せられているのはもとより單なる机上の所作事ではない。チベット音韻學研究の現段階として、この所論より以上を望むことは無理であらう。事實本書におけるチベット原名の復原は、實に正確なものである。次にトンミの著わした文法書が二部であるか八部であるかという問題について (本書九二頁)、わたしは始めから二部しかなかったであろうと考えた。ところが *Dharmapalabhadra* の三十頌解説 (東北藏外目錄七〇七)の二葉目表の最後に、「トンミが作つたと傳える *Mun pa'i sgom ne* 暗黒の灯は、トンミによつて作られたであらう。それは、インドのことを讀む方法であるけれども、

チベット語における用法(を論じたもの)ではない」と記されている。また昨年カリンボンでリクジンワンポというチベット人學者(英國へも招かれたことがある人)から聞いたところによると、更に *Yab gad klu dban ngu! rgyan* 文字の釋・龍王の頭飾という書があつてトンミの著作だという人があるとのことであつた。傳説であるから、この二書をトンミの眞作と断定はできないが、さりとて三十と性入との二部しかなかつたということも言えないわけである。それにしても、「暗黒の灯」はチベット語文法書ではなく、また「龍王の頭飾」も單なる綴字の説明で文法らしい文法書とはいひ難いもののである。著者は、二部しかなかつたと断定はしないが、「實際にはこの二部のみでチベット語の或る種の構成論の説明は充分に與えられている」といつておられるのに過失はないわけである。

さて、各論に入ると、大きな問題を年代順にとりあげて論じられている。先ず各論第一に、統一前後のチベット、という問題で、女國から始めて蘇毗・羊同などについて論じられている。これらの國々の位置が明確にせられることによつて、チベットというものの輪廓がはつきりと浮び上つてくることになつた。次にチベット王朝の祖先に關しては、各々の傳承に少なからぬ出沒異同があるために、チベット史研究に手をつけ始めた者は、誰しも、ラトトリ王以前は無意味な神々の積重ねのパンテオンに過ぎないという結論を先に出してしまつて、半ばは投げ捨てておきたいような氣持になる。しかるに著者は、すべての史料を緻密に對比して整理せられた。オデプギェルなる祖先神に對する著者の結論は確固たる史料による證明を得たものとはいえないが、現在の史料の段階ではこれ以上を望むべくもない。またラトトリ王以下の五王は、新傳上と對比せる見事な解決

を見た。

第二、古代統一王國吐蕃の出現からは、歴史的に明確となつて來るので、興味は深くなる。先ずガムボ王の逝去については、從來六五〇年として誰も疑いを挟まなかつたが、著者はそれを六四九年でなければならぬと断定した。これは豫想しなかつた新發見で、これに對して驚いたのはわたくしばかりではないであらう。ただ王の生年が、遂に決定を見るに至らなかつたのは遺憾である。テブゴンによつて王の生年を五六九年とした學者は多い。しかし以前からわたくしは、テブゴンが、中國史料の逝去六五〇年から八十二歳生存説によつて逆算したもので明確な根據があるものではなからうと考へていたが、いま本書二一七頁にそれが述べられているのを見て、全くそれに同意する。そして結局、生年を決定することができなとする著者の態度は、むしろ公正であるといわねばならない。

次にガムボ王以前の各家族の服屬關係より述べて、王がこれを統一していつた狀況が明らかにせられた。統一に成功した王が自己の地位を高めるために文成公主降嫁の強要となり、當然そこに吐谷渾との衝突を経て公主の入藏となつた過程が刻明に論述せられている。文成公主を取り扱つた論文は少なくないが、かくも内外の狀態を整理し詳細に記したものはないであらう。その中、少し疑問に思ふのは本書二六八頁に「翌(貞觀)十五年正月には吐蕃よりガルトンツェンが迎へに來た……」と記されていることであつて、それは舊唐書太宗本紀によられたものである。なるほど同本紀にはそのように記され、前年十月の條には單に使が來て黄金などを獻じて婚を求めたとある。しかし通鑑卷一九五の十四年十月の條に、「贊普遣其相祿東贊獻金五千兩……以請昏、上許以文成公主妻之」とあり、唐會要

卷九七に、「十四年遣其相祿東贊致禮請婚姻、獻金五千兩……」「十五年以文成公主妻之」と記されている。また唐蕃會盟碑には祿東贊の名は見えないが、「大唐の國二十三年過ぎたとき……」すなわち貞觀十四年に話がまとまつたように理解できる。それで祿東贊が迎えに來たのは前年の十月で、公主の出發が翌十五年正月であつたと見做す方が妥當ではなからうか。

第三、ガル一家の内外活動から本書の最後までの處は、著者の獨壇場といつても過言ではあるまい。ガルトンツェン(祿東贊)の吐谷渾攻撃は、何時果てるとも知れない戰爭に突入することになるが、今までは、その攻撃開始が通鑑によつて顯慶五年(六六〇)と考えられていた。しかるに著者は、それを同四年であるとせられた(本書三〇九頁)。この通鑑の記述の起政とは、一体トンツェンの子の中の誰を指すのであろうか。この理解し難い名といい、顯慶五年にかけての誤りといひ、これらは通鑑のここの記載の正確さを物語るものでないであらうか。

次にガルツェンニヤの活動についての所論も、またわれわれを驚嘆させる。中國史料では長子ツェンニヤ(贊悉若)が早く死んだと記されているために、その活動が次子ロンチンリン(論欽陵)のそれとしか思えなかつた。ところが新出史料によつて、長子が十八年もの長きに亘つて大論の位にあつて指令していたことが本書によつてはじめて明らかにせられた。中國史料に何故に彼の名が出なかつたか。それは戰闘の第一線にあつたのは、次子ロンチンリン(本書三二五頁、三二九頁)と三男ツェンワ(贊婆)(本書三三四頁)であつたから、中國にはその背後にあつた長男の大論の存在がわからなかつたのであらう。舊傳上をして「自漢魏已來、西戎之盛、未之有也」とい

しめたこの大手腕家ツェンニヤの存在を浮び上がらせた著者の功績は大きい。さて、本書三三四頁に「吐蕃の活動は實は案外積極性のあるものではなかつた」とあるのは、黑齒常之の活躍によることは勿論であるが、通鑑の儀鳳三年九月の條に「師德宣導上意、諭以禍福、贊婆甚悅、爲之數年不犯邊」とあつて、婁師德がチベット軍に趣いて説得工作をするというような方法も同時にとられていたのではなからうか。著者はこの記載を、本書三七一頁に、贊婆が唐に對して親近感を持つていた證據として利用しておられるが、これを寧ろ説得工作と考えては行き過ぎであらうか。尤もこの記載に於て、贊婆が數年間も犯さないといつてはいるけれども、翌々年の調露二年に入寇しているから、その點に不審が残る。ちなみに、この調露二年の攻撃を、舊傳上は儀鳳四年の前にこれを記し、新傳上では、儀鳳四年の翌年と永隆元年との條に二回入寇したようになってはいるが、著者は舊唐書高宗本紀によられたらしく、それを調露二年とせられたのは適切である。次にマンソンマンツェン王の死について、從來は儀鳳四年ということが決定的であつたが、それもいま著者によつて同元年と訂正せられている。

次にロンチンリンの大論の時代になると、長年月の戰爭のためにチベットは次第に弱つて、ガル一家も遂に滅亡するのであるが、その間の狀況が詳細に述べられている。則天武后に對する郭元振の上言(本書三二六頁)の中の、民心離反を裏書きするものとして、新傳上に「又明年(天授二年)大首領曷蘇率貴川部與黨項種三十萬降」とあり、通鑑に「曷蘇事洩、爲國人所禽」とあつて事は露見したけれども曷蘇が唐へ降ろうとしたことがあり、また舊唐書黨項羌傳に、「其在西北邊者、天授三年内附……」と見えている。次に、ツェン

ワの「亡命の時期は兩傳では明らかではないが、通鑑の記載に従つて聖曆二年四月と見るのが正しいであらう」(本書三七二頁)といつておられるが、舊唐書則天武后本紀には、「(聖曆二年)四月吐蕃大論贊婆來奔」と出ているから、それを確定的とみてよい。その翌年の久視元年の涼州入寇について、著者がそれを三八六頁の註六五に、洪源谷の重要性を示すものとして引用しておられるのは勿論正しい。しかしこの攻撃は、ツェンワが未だ洪源谷の守備についていかなかったとおもわれ、逃げてその方面にいたのに對して彼の行爲を怒つて行われたものと考えられないであらうか。

各論第四の金城公主の入藏の年次とその背景の論述せられる中で、ここでも王の交代の年などについての中國史料の訂正が行われたことも注意すべきであるし、また、父王のための婚姻政策を、王の出陣中の死のために皇太子に代えても強行せざるを得ずして、七歳の皇太子に二十二歳の公主が降嫁した事情も、そこでまことに明瞭となつた。次に公主入藏の際の化粧料とされた河西九曲の地の重要性が詳細に究明せられ、これが苛烈な戰爭の據點となつた理由がよくわかる。そして公主が夢想だになつたその化粧料を利用しての戰爭を中止せよとした努力が、第二回の交戦の後ようやく赤嶺の會盟となつた事情もよくわかる。しかしそれも束の間で三たび烈しい戦いへ突入し、赤嶺碑は唐軍によつて碎かれてしまつた。公主の心情たるや察するに餘りあり、またこの碑が碎かれて、畢に得られないことは、われわれチベット學研究者にとつても惜しむべきことである。公主が五十一歳死去というのはテブゴンのみで他に何ら傳えるものがないから、これを信用するより仕方ないが、それは史料的には聊か貧弱な氣がする。新しい史料を待望する。思えば公主

はまことに不幸な育い立ちをたどり、政略結婚を強いられて遠い異境の地で淋しく一生を了つたのであらう。

以上、論述の順を追つて極めて拙い書評をあえてした。本書の全般的な特色は、山口先生の序に簡潔によく表明せられているから改めて述べる必要はない。そこでわたしに感じられたことは、最近までにわれわれが入手し得たすべての史料を驅使して、まことに快刀亂麻を斷つような想いである。

チベット學の歴史部門研究ではヨーロッパよりおくれっていたわが國が、著者によつて一躍して世界の水準を超えたことは何といつても喜ばしい限りである。昨年春パリのモンパルナスからほど遠くない所にあるドミエウイ教授の自宅を訪れる機會に恵まれた際に、談半ばにして著者によつて今まで發表せられた論文に觸れたとき、教授はあらゆる贅辭を惜しまれなかつた。ドミエウイ教授が、本書を手にして感嘆しておられるであらう様子が、いま、わたくしの眼前に見えるような氣がする。

終りに慾をいわせてもらうならば、著者の使用した材料にわが國にのみ存するといふものが一つでもあつたならば、ということである。もしそれがあつたならば、世界の學者をして一層の驚異の眼をみはらしめる結果を生み出したであらう。わたくしはヨーロッパからの歸途インドへ立寄つて、デブマルと同じ著者のものなど日本に無い二・三の文献をフィルムに収めて歸り、近くその研究に着手しようとしているのであるが、それらは稀書であるとはいつても所詮はチョエジョン類であつて同時代的史料でないから、本書の内容以上にどれ程も新しいことは見出せないであらう。同時代的な史料を得るためには、科學的なチベット探險をしなければならぬが、

わが國の學界がそれを行う機会を逸してしまつて、動亂によつてチベットの文献が失われつつあるのを見ると、くれぐれも残念でならない。

とまれ偉大な著者の努力と學識に驚嘆するばかりである。同時に、このような特殊な分野についての研究を育成せられた京都大學の故羽田總長をはじめ諸教授に對して、ただただ敬意を表する次第である。最後に、一日も早く下巻が上梓せられて完結せられんことを念願してやまない。

(稻葉正就)

羽田博士史學論文集 / 下巻 言語・宗教篇

昭和三十三年十一月 東洋史研究會發行
A5版 本文六八六頁 圖版十八頁
索引五四頁 佛文要旨一一七頁

羽田亨先生が中國、塞外、中央アジア史家として、民族・言語・文化・藝術等の各方面に亘り、東西兩洋の一巨峯であつたことは、贅言を須いしない。然し博士生前發表の諸論攷中には、既に入手閱讀するに困難を歎ぜざるを得ないものがあつた。先生易簣後、幾年も出でずして、受業門下の諸位と三島海雲氏の義舉とにより、曩に上巻歴史篇が刊行され(昭和三十三年)、ついで今、下巻言語・宗教篇の巨冊が上梓されて、學界積年の渴望が滿された。先生が遺された論文のどれ一つとして、その考證の嚴正・博洽ならざるはない。ために單に紹介の爲め一讀するさへ、質・量共に洵に容易の業ではない。加うるに故博士の講筵に侍した日なく、かつウイグルの歴史、言語の專家でない筆者は到底、紹介の任ではない。これには他に自ら人の

あることは、最もよく自覺する處である。にも拘らず敢えて蕪陋の一文を草する所以は、先生との多少の因縁からである。

一九四二年、筆者がトルコ赴任に際し、會々歸洛の博士と同車するの榮に恵まれたが、その折、トルコに於いては、當時アンカラ大學に在つたトルコ語學者 Fr. von Gabain につくべきを教へられた。着任してからは、些かこの國の言語を學び、同女史をも識り、また Dr. Rahmet により日本現在ウイグル文書と羽田先生のこれが研究論文リストの作成を依頼されたことがあつた。筆者はかかる因縁から當時戰爭のため入手し難かつたトルコ語學會刊、Kudaku Blik 一部三冊(ラドロフ、フェルガー)を速く先生に獻じたことであつた。筆者はこうした自己感慨から、紹介をお引受けしたものの、辛うじて大著の全貌をただ目録的に羅列して、責を免るの外はないことを豫め愿ひして戴きたい。

まず本書の結構を示す(便宜上、論文に通し番號を附す)。

- 1 回鶻文字考
- 2 突都語の回鶻碑文
- 3 回鶻文女子賁渡文書
- 4 回鶻文の佛典に就て
- 5 回鶻文の天地八陽神呪經
- 6 回鶻文法華經普門品の斷片
- 7 回鶻譯本安慧の俱舍論實義疏
- 8 トルコ文華嚴經の斷簡
- 9 日本に傳はる波斯文に就て
- 10 新波斯教殘經に就て
- 11 景教經典一神論解説